

「鹿背山城何でも知ろう」講座 平成 25 年 1 月 20 日

講師 岩井 照芳

於：東部交流会館

演 題 「鹿背山城の防御施設と大和を支配した鹿背山城主」

I 鹿背山城の概要

1 鹿背山城とはいかなる城か

- ① 石垣の無い山城やましろで中世の城である → 築城年不明
- ② 中世城郭としては山城国最大の大きさの城 → 在地の国人（木津氏）クラスの所有する城でなく、一国を治める守護クラスが城主の城
- ③ いつの時代の城か → 史料から 15 世紀には確実に存在している その城を信長が上洛する直前の 1560 年頃に改造しているが遺構がよく残っている。

2 鹿背山城の特徴

- ① これまでの常識では城は武士が造る → 鹿背山城は興福寺が造った城である。
- ② なぜ寺が城を持つのか → 大和国を支配 → 守護同等・守護を置かさない寺

3 なぜ鹿背山の位置に築城したのか

- ① 古代から泉津（吐師～木津～鹿背山）を抑えることは重要 → 水陸交通の要衝
- ② 大和国に取って北方（京都）からの防御
- ③ 経済的には相楽・綴喜郡 → 地域の支配
- ④ 政治・宗教的には強訴のルート → 木津殿・平等院
- ⑤ 木津地域を見はらすには最も良い場所 → 支配する方・される方の象徴
- ⑥ 鹿背山地域に特別な意味 → 鹿山寺・万葉集（三諸みもろつく鹿背山）社を祀る対象としての山 神がやどる場所（神聖な場所） → 鹿背山という山はない（地域のことをいう）

II 第 1 期の鹿背山城主

1 第 1 期の期間（興福寺時代）

- ① 築城年（不明） → 築城～1479 年～1560 年頃の期間 → 城主は興福寺

2 第 1 期の鹿背山城 → 史料から（大乘院寺社雑事記）

- ① 成身院（興福寺学侶）加世山ニ出帳云々 文明 11 年（1479）10 月 3 日条
- ② 十六日成身院ハ自加世山移中川寺云々 文明 11 年（1479）10 月 18 日条

- ③ 木津執行ハ加世山ニ引退了 文明 11 年 (1479) 10 月 25 日条
 ④ 古市ハ鹿山ニ取陣、西 (古市西) ハ取陣般若寺云々 文明 17 年 (1485) 4 月 5 日条

3 興福寺とはどのような寺か

- ① 最高に格式の高い寺 藤原氏の氏寺
 ② 興福寺の位格 → 塔頭と家元 → 僧位僧官 → 塔頭と家元
 ③ 衆徒と国民 → 衆徒在地の武士の棟梁で興福寺の僧 筒井氏ら → 国民春日信仰をする在地の武士の棟梁 越智氏ら
 ④ 経済的基盤の確立 → 在地土豪 (武力) との結び付き → 宗教的権威
 大和一国の支配 → 春日社の支配 → 春日祭祭祀権者は氏の長者 →
 春日若宮おん祭 → 春日社を一体化 (配下に組み入れる) = 春日信仰をする
 在地の兵力 (国民) も支配下に入れる 越智氏ら
 強大な兵力を持つ寺 → 畠山氏、細川氏、大内氏に次ぐ兵力
 維新期でも学侶は血脈純正にて紫宸殿に昇殿を許され天顔に咫尺、華族か士族

4 在地の木津氏とは

- ① 木津執行 = 木津殿の責任者 (?) = 木津和泉守 (家) か → 興福寺衆徒
 ② 木津和泉守 (家)、他に 伊予守 (家)、大炊頭 (家) → 木津氏
 木津氏 → 木津十三家 (親類衆?) → 家臣団 (中・生間・木村、家老クラス?)
 他に小寺氏 (寺社雑事記)、庄村氏 (多聞院日記)、東下司、西下司、
 ③ 興福寺一乗院方の衆徒 → 一乗院門跡覚慶 (外祖父は近衛尚通) 権小僧都 →
 足利 15 代将軍

III 第 2 期の鹿背山城主

1 第 2 期の期間

- ① 1560 年頃 ~ 1573 年頃 城主は松永弾正久秀

2 第 2 期の鹿背山城 松永の城になった時期

- ① 永禄 2 年 (1559) 8 月 10 日大和に乱入 → 信貴山城を大規模な城郭に改修して
 大和支配に乗り出す → (信貴山城は城郭建築史上初期の天守閣 → 伊丹城
 の天守 (細川両家記 1520 に記す) が最初か
 ② 永禄 3 年 (1560) 多聞山城を築城し始める 興福寺の屈服 → 鹿背山城はこ
 の頃に松永の手に (織田信長桶狭間の戦い 5/19)
 ③ 永禄 5 年 (1562) 8 月 松永久秀徳政令を発する → 木津、狛、加茂、瓶原、
 笠置、当尾、和束、→ 確実に相楽郡の東側を掌握

3 第2期の鹿背山城の終焉

- ① 永禄11年(1568)9月14日条 昨日釣閑齋・香西以下三千ほとにて木津ノ平城へ入候 毛見ニ下処やうやう鹿山城へ逃入了、 (多聞院日記)
- ② 永禄11年(1568)9月26日 織田信長が上洛 松永久秀信長の配下に入る
元亀2年(1571)5月 將軍義昭と信長とが不和となり久秀、信長に反旗をひるが
えす。このため筒井順慶が信長に属した。
元亀2年(1571)6月13日条 木津三百も色立由申了(二条宴乗記)
元亀2年(1571)7月3日条 木津殿三男上意様へ人質に被上了ト(多聞院日記)
- ③ 天正元年(1573)久秀、織田信長包圍陣に加わろうとしたが、4/〇武田信玄、8/20
朝倉義景、8/28 浅井長政の死亡により、状況不利と見て信長に下り12月26日、
佐久間信盛に多聞城を明け渡して久秀は信貴山城に退いた。
鹿背山城も同様に明け渡しか → 信長にとって鹿背山城ぐらいの城は放置か？
- ④ 天正2年(1574)3月28日 「蘭奢待」を織田信長が切り取る
- ⑤ 天正2年(1574)4月25日 カツ山ノ城落了、賄ニテ落由也 (多聞院日記)
もしカツ山ノ城=鹿背山城であるならば誰が立て籠もり、誰が攻めたのか説明
が難しい。この時期木津地域で信長に対抗するものはいないのではないか
カツ山ノ城は鹿背山城でない可能性が大きい。
- ⑥ 天正5年(1577)信長の一国一城令により多聞城は破壊された
天正5年(1577)10月11日 松永久秀信貴山城で敗れる。

IV 鹿背山城の防御施設

1 鹿背山城の縄張

- ① 「縄張」とは築こうとする城を地形に合わせて区画し、守り易く攻めにくくするプラン造りをいう。
鹿背山城の縄張りは、連郭式と階郭式を折衷したプラン → 地形的な制約とその地形を最大限利用するため。

2 城となる条件

- ① 中世の城郭は郭(曲輪)、土塁、堀の3つが防御施設として代表的であるが、城として認められる条件は、そのうち2つ以上無ければ認められない。→ 鹿背山城は種々の防御施設が整っている。
- ② 郭(曲輪)の斜面を切岸というが、石垣の無い時代の城だから、急な切岸でなければ攻めやすく、切岸の高さと角度が甘いと郭(曲輪)とは認められない。
ただ、時代が遡れば防御施設は貧弱(一期目)となる。

3 鹿背山城の防御施設

- ① 主郭
- ② 曲輪
- ③ 虎口
 - 平入虎口
 - 食違虎口
 - 柵形虎口
- ④ 櫓台
- ⑤ 切岸
- ⑥ 箱堀（堀切）
- ⑦ 薬研堀（堀切）
- ⑧ 土塁
- ⑨ 豎土塁
- ⑩ 豎堀
- ⑪ 畝状空堀群（畝状豎堀群）
- ⑫ 横堀
- ⑬ 水の手
- ⑭ 土橋
- ⑮ 武者隠
- ⑨ Y字形防御



加茂町

加茂町河原

大野山

加茂町法花寺野

赤石

鹿背山

美加原

木津

木津

山城町

山城町

木津川

木津町

北堂

菅井

西町

北之庄

菅山